

郷土と治水



決壊口

牧田川

揖斐川

今尾橋

養老町
養老町教育委員会

あいさつ

わたしたちの町は、急峻な山地と低湿地という両極端な地形に位置し、昔から人々は水禍から共同して自分たちの生命・財産を守ろうと、たゆまぬ努力を続けてきました。

特に江戸時代には、薩摩藩・長州藩等他郷の多くの人々による大治水事業が完工されたことは、ご承知のとおりです。

時は移り、昭和34年には集中豪雨、伊勢湾台風の直撃を受け、二度までも多芸輪中は泥海化し、悲惨な姿となりましたが、住民各位の烈々たる郷土復興への情熱と、郷土愛に燃える献身的なお骨折りにより、今日のような隆盛発展する養老町に成長してまいりました。

爾来、年を経ること三十年。この災害からの復興を記念して、養老町では5月13日、14日にイベントを開催します。わたしたちは、幾多の困難を乗り越え、営々として築いてこられた先人の偉大なる功績に、深く感謝し、これらの偉業を末長く後世に伝えとともに、今後の治山・治水行政に生かしてまいる所存です。

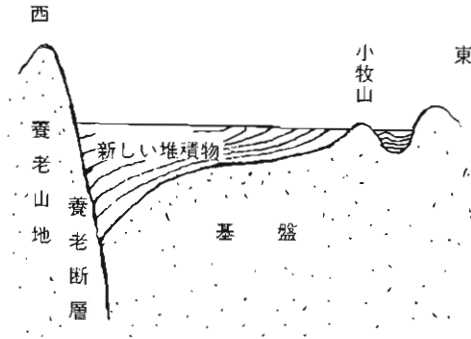
最後に、この冊子を住民各位が養老町の治水史を知る大切な資料として、ご活用いただければ幸いに思います。なお、この冊子を発刊するにあたり、執筆等、ご協力くださいました編集委員各位に心からお礼申し上げます。

平成元年 五月

養老町長 清水敏郎

濃尾平野はどうして出来たでしょう

濃尾平野はもと海の底でしたが、約二億年前から海底がだんだん高まってきて、陸地となりました。その後、地面が大きく落ちこんで、また海の底になってしまいました。私達がながめる養老山地の東側は、その時に出来た断層であって、二千メートル以上も落ちこんだといわれ、現在でも、養老山地の麓（ふもと）一帯は、濃尾平野の中でも一番低い地域であります。



第1図 濃尾平野断面図

その後、さらに沈んでいったため、養老山地や赤坂山など

さえ海底となってしまった

時が長らく続きましたが、

又、海底が高まってきて、

水面から姿をあらわしてき

ました。

今から八千年位の昔は、

近鉄養老駅付近が海岸であ

ったと思われます。

その後、周囲の谷や木曾

川・長良川・伊尾川（揖斐

川）・牧田川などが運び出

す土砂や石などが長年月の間に積み重なって、現在のよう

な濃尾平野ができました。

現在は、年々少しずつ沈下しています。

養老町の土地は、北部が高く、南東部が低く傾いています。したがって、今の牧田川の水は、定まった河道はなく、南東方の低地に向って自由に流れ下って土砂や石を運んだのです。また、養老山地や象鼻山（ぞうびさん）などの谷から押し出された土砂や石などが積って出来た扇状地（せんじょうち）も次第に広がっていきました。このような時代が何千年も続きました。

郷土のあけぼの

私たちの先人が住むようになってから縄文時代・弥生時代を経て、北部の地域や養老山麓の扇状地は次第に文化が開けて来ました。象鼻山古墳群や多岐神社古墳、山麓に残る大小の古墳、出土する土器などが、その当時をしのばせてくれます。大化の改新（六四五）に定められた条里制（じょうりせい）の名残りと考えられている大坪、飯田の八ノ坪・東九ノ坪・西九ノ坪、祖父江の一之坪、沢田の丁田、鷺巣（わのす）の一町田・四反田・三反田・飯ノ木の五反田などは、随分古くから開けている土地であります。

しかし、南東部の低い地域では、あいかわらず長い間、その大部分は一面の湿原でありました。

治水の始まり

時代が移り、鎌倉時代に入っても、牧田川には今のようない堤防はなかったので、川の水は、自由に南東の低い方へ向

て流れていました。したがって、大雨が降っても、水は一面に散らばってしまつて、洪水になることはほとんどなく、人びとは、付近より土地が高くて、めつたに水をかぶらない土地（微高地）を選んでそこに住み、田畑を耕やして生活するようになり、現在の牧田川流域の高い土地から次第に集落ができるようになりました。

室町時代の終り頃までには、微高地と微高地との間をつなぐように堤防を築き、牧田川の河道を定めてしまひました。養老山の谷水や麓の湧き水は、片側堤を築くことによつて山麓沿いに南方へ流すようにしました。こうして津屋川がつくられ、室町時代の終り頃には舟運も開けていました。

治水への努力

新田の開発と輪中の形成

江戸時代に入ると幕府が新田の開発を奨励したため、たくさんの新田が開発されました。

新田を開発するには、先ず開発しようとする土地を堤防で囲つて、大雨が降つても水が入らないようにします。用水路や悪水路を掘り、堰樋を設けるなど、たくさん費用と大へんな苦心や労力がかかりました。

この堤防に囲まれた地域を輪中といいます。又、新田ばかりでなく、住んでいる集落も新田といつしよに堤防で囲つた輪中もでき、輪中はどんどん多くなりました。

津屋川流路の新しい造成

津屋川は、室町時代の終り頃までに河道が一応定まり、平常は流量も少なかったが、大雨の時は氾濫をおこし、たびたび大被害を与えたので、堤防の改修が強く要望されました。

明暦二年（一六五六）大垣藩が鷺之巢村・舟見村、高須藩が小倉村・飯之木村の新堤の堀替えを行い、両藩の協力によつて、ほぼ現在の河道となりました。堤防は、ほとんど左岸堤のみで南濃町で揖斐川に合流し、多芸輪中を水害から護っています。



小倉からの津屋川堤

第2図 輪中の発展 新田の開発



この図は、養老町内における新田開発と輪中の形成についての概略を示したもので、()内はその西暦年数を示します。

鷺巣北畑新田・南畑新田、石畑喜多村新田、柏尾新田、若宮新田なども開発されましたが、時代・場所がはっきりしない点があります。

多芸輪中の成立と範囲

多芸輪中は濃尾平野の多数の輪中のうちで大きな輪中の一つであります。金草川・牧田川・伊尾川・津屋川に囲まれている地域で(第2図参照)、幕府領、大垣藩領、尾張藩領などが入り組んでいて、元文三年(一七三八)では、二十九か村、一万五千石余でありました。

この輪中の大部分は、連続した懸廻堤かけまわしづつみによって囲まれています。北西限は通称「アホ除」よげで限られていました。「アホ除」は、金草川の堤防から西南に約六百よげづつみの除堤で、片側堤だけでした。明暦二年(一六五六)にできたもので、ロケ島・西岩道・岩道村や下笠村の中島などを水害から護る目的でありました。

その当時、伊尾川沿いの下笠輪中、根古地輪中(昭和二十年現状となる)は、すでにあった伊尾川沿いの築捨堤つきすてづつみを利用してつつ形成されました。下流の大牧輪中・高柳輪中の形成は、多芸輪中の中では、最もおそく、この地域が低いことや、伊尾川の堤防の構築が大規模なものであったためであります。

この高柳輪中の形成により、津屋川沿いと伊尾川沿いの堤防が始めて結ばれて連続堤となり多芸輪中が形成されたのは、寛文十年(一六七〇)頃でありました。

昭和五年に組織された多芸輪中水害予防組合の区域には、多芸輪中とは別に形成されていた島田輪中・烏江輪中や牧田川右岸の平坦部へいたんぶを含めて拡大されました。

治水

洪水の多かった美濃

濃尾平野は土地が低く、その上、東の方が高くて西の方に低く傾いていました。又、木曾川・長良川・伊尾川は、東西に連り合っつなて、網の目のようになっていました。

従って、洪水は木曾川から長良川へ更に、伊尾川へと落ちこんで、伊尾川流域は最も被害を受けました。

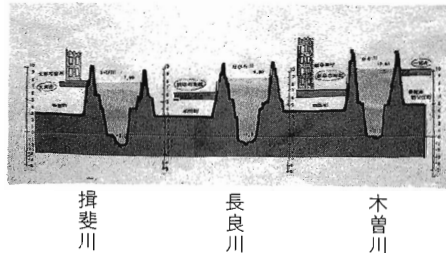
特に、徳川家康が慶長十六年(一六一一)に、木曾川の左岸(尾張側)に丈夫な御囲堤おかこいづつみといわれる堤防を築いてからは、美濃側の水害が大変多くなりました。

私達の郷土は低地が多いので、牧田川・杭瀬川・相川・色目川・津屋川などの堤防が破れて洪水となり、非常に苦しみました。

養老町内だけでも、江戸時代から現在まで、約四百年の間に百十回も大小の洪水がありました。

中でも、明治二十九年(一八九六)には、七月と九月に二度も大洪水があり、木曾・長良・揖斐の三大川の外、大小の河川がごとごとく氾濫し、養老町も山麓を残し、全部水没しました。その時は、大垣城石垣の中段まで浸水しました。

木曾三川の断面図



集中豪雨と伊勢湾台風

昭和三十四年（一九五九）八月十二日から十三日かけて記録的な集中豪雨があり、ついに、十三日に牧田川堤防が根古地で百二十^{りつかい}決壊し、多芸輪中二千九百^{ひさん}が泥海となり、二十九日間にわたって湛水^{たんすい}し、多芸輪中は悲惨な状態になりました。更に、九月二十六日伊勢湾台風のため大增水し、折角、築いた決壊口の仮堤防が再び決壊し、多芸輪中は二度も浸水しました。養老町に水害救助法が発動され、国・県・町の救助活動が行われました。

伊勢湾台風は、岐阜・愛知・三重県に大惨害を与えました。特に、伊勢湾岸地域では、多くの死者が出ました。



根古地にある決壊口の碑



集中豪雨による決壊口付近

（中日新聞提供）

〔堤防決壊前〕

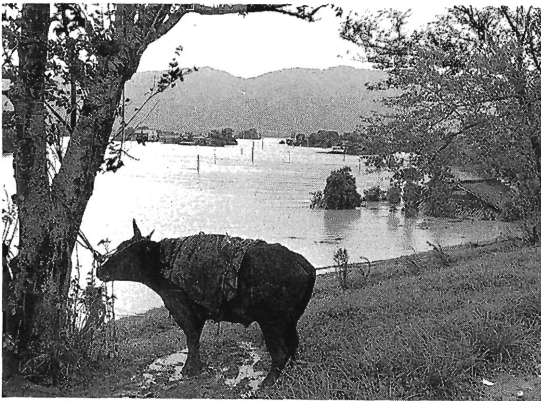


堤防補強工事（根古地）



どのう
土囊はこび

〔堤防決壊後〕



牛も家族として無事避難、
水害後は耕運機にゆずり、
姿を見なくなった。

避難小屋

自宅は泥水の中。やむを得ず堤防の小段に杭と竹・むしろの囲い、トタン屋根、原始生活さなからの住民。
救護活動のお陰で、食事時間になると、おにきりが届けられて感謝する。



小舟

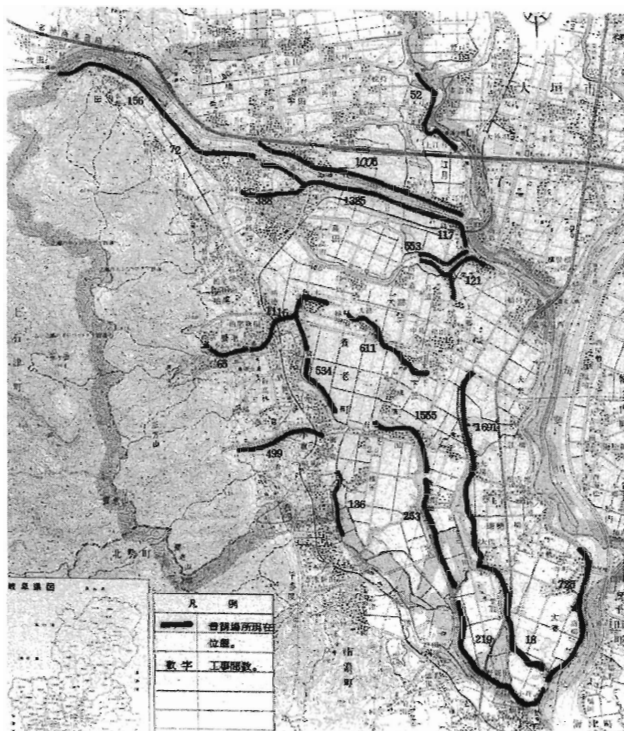
この舟に乗って、堤防から我が家へ通って、家守りをした。（養老町南部の低湿地域では、徳川・明治・大正・昭和時代には、この舟に家族が乗合わせて、田・畑へ行き、農作業につとめた。従って、一戸に一艘は持っていた。）
（岐阜県広報課提供）

治水工事

宝永の大取払い 宝永元年（一七〇四）、幕府は、川の水行をさまたげているものを全部取払えと厳命を下し、川の中の樹木・葎（よもぎ）などすっかり取払い、民家まで移住しました。

主な百姓自普請 宝永六年（一七〇九）、大塚村と直江村が牧田川沿いに堤防を築きました。又、同じ年に飯積・祖父江・飯田・蛇持・宇田の六ヶ村は共同で自普請を行いました。大坪村も同じ年に大坪地内を流れていた色目川を現在のよう
に川替えをしました。

養老町内薩摩工事分布図



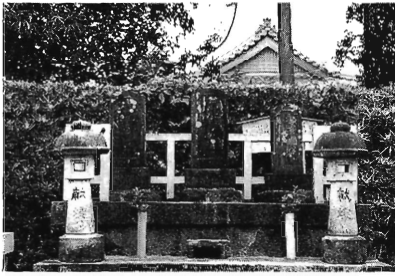
宝暦の御手伝普請
宝暦二年（一七五三）十二月、幕府の

命によって薩摩藩による御手伝普請が行われました。広大な木曾・長良・伊尾の三大川の流域にわたって、一か年半の歳月と八十余名の尊い犠牲者と四十万両ともいわれる巨費をついやし、あらゆる辛苦を忍んでようやく完成しました。しかし、大牧村鬼頭兵内宅を元小屋として総指揮を取っていた総奉行平田鞆負は、多くの死者を出したこと、巨費をついやし、莫大な借財を残したことに責任を感じ、宝暦五年五月二十五日、自刃しました。年五十二才でした。遺体は桑名まで舟で運ばれ、ここから陸路で京都伏見の大黒寺に葬られました。

薩摩藩の御手伝普請のお陰で、水害は大変少くなりましたが、それでも、なお、諸方で大水害があつたので、幕府は明和三年（一七六六）に長州の毛利氏・岩国の吉川氏・小濱の酒井氏に御手伝普請を命じました。

養老町では、この後数回長州藩及びその他の藩の御手伝普請を受けています。

明治政府の三川分流　オランダ人デレーケの治水計画によつて、木曾・長良・揖斐の三大川分流工事が明治二十五年（一八九二）に着工されて、明治三十三年に竣工しゅんこうしました。この結果、三大川の水系が独立区分され、河川敷地も広くなり洪水の防止に大きな効果がありました。



天照寺の三士の墓(根古地)



浄土三昧の二十四士の墓



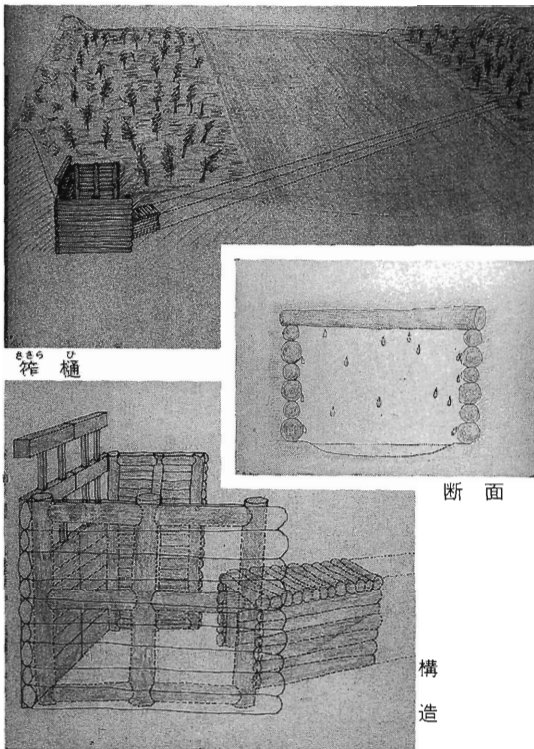
薩摩工役館跡 平田靱負翁自刃の地(大巻)

用排水

用水

土地の高い地域では、稲作に必要な水を取入れるのに大へん苦労しました。それで牧田川から水を取入れて用水とし、沢田村井水・桜井村井水・山田井水(栗原・橋爪・中・宇田・豊の各村組合)、石畑村井水(五日市・石畑・竜泉寺・上方の各村組合)、宇田井水などがありました。

しかし牧田川はふだん水が少なく、特に石畑村井水は取入口が一番下流にあったため苦労も大きく、河底の下に四角に組んだ丸太で作った長さ数百メートルのトンネルを築き、そのすき間から落ちる伏流水を集めて用水路に流す「笮樋」という珍



断面

構造

らしい工法を考案、施工しました。

用水の不足は、村人の死活にかかわる大問題なので、土地の高い所にある村々の間では、しばしば水争いが起き、公儀の裁判になったこともあります。

そこで用水の足りない時は、上の方の村から勝手に先に取るのではなく、村の間で話し合い、「番水」といって、何時から何時まではどの村が水をいれるというように順番をきめました。

地下水の豊富な一部の地域では、江戸時代の後半から「掘抜井戸」を掘り、灌漑用水とすようになりました。天明二年（一七八二）大垣の蒔蒔屋文七が考案したといわれていますが、豊かに自噴する井戸の利用は次第に広まってきました。



掘抜井戸

排水

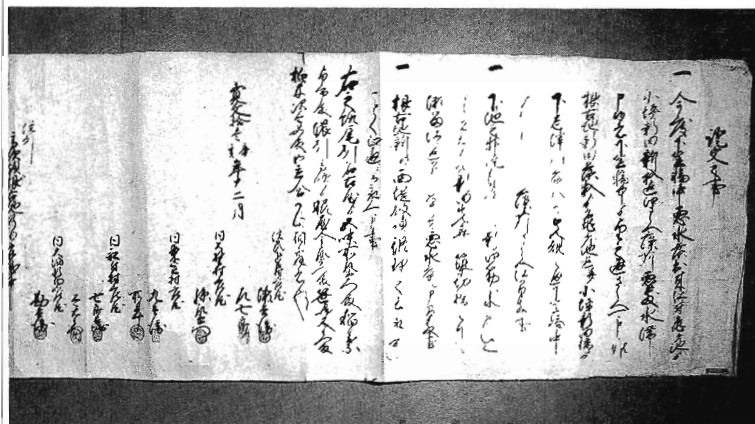
堤防が築かれ河道が固定されたため、出水のひどい上流から押し流される土砂・礫によって河床は次第に高くなり、田面より河面の方が高いいわゆる天井川になってしまいました。したがって輪中内の水は自然のままでは川へ落とすことが出来ず、排水のための悪水落江を築くなどの工事が必要となり、大へんな経費と労力を費しました。

下笠輪中悪水落江証文（養老町所蔵）

下笠輪中落江

寛文十一年（一六七二）

下笠輪中の悪水は、根古地輪中・釜段輪中・小坪輪中の境に沿って、二千六百間（約四七〇〇間）の落江を築いて小坪村まで落とし、樋門を築いて津屋川へ排水することにしました。現在は五三川といえます。落江を通してもらうためには、江代米を支払うほかいろいろな条件がありました。

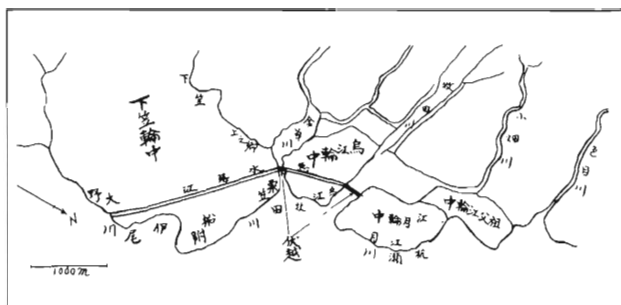


両江悪水落江

江月輪中では、元文五年（一七四〇）牧田川の川底を横断する水筒（厚いヒノキの板で囲んだ四角な水の通り道）を伏せこんで鳥江輪中へ落とさせてもらいました。

鳥江輪中では、寛保年中（一七四一〜一七四四）に金草川の川底に水筒を伏せ越し、栗笠村から大野村まで二千三百メートルの悪水落江をつくらせてもらって伊尾川へ落としました。

天明五年（一七八五）江月輪中と鳥江輪中が共同で悪水路を丈夫に築き直しました。



先人の苦勞がしのばれる両江悪水落江



土地改良で姿を消した堀田

株井戸

土地の低い地域では、家庭で使う掘抜井戸でさえ、どの村は何本というきびしい制限があつて、一軒で一本の井戸を持つてゐるのは極めて少なく、一般の村民は二軒或は数軒で一本の井戸を共用してゐました。このように厳しい制限をして悪水の溜るのを防ぎました。この許された井戸を株井戸といひます。



堀田

低地では、水田の一部を犠牲にして堀とし、掘上げた土を水田に重置して、水田面を高くすることが行なわれ、これを堀田といいます。堀田は稲が水をかぶって腐るのを防ぐのに、大いに役立ちました。

明治から現代

治水

水防組織の強化

明治十一年（一八七八）に県は水防規則等を制定し、当地に於ても明治二十年（一八八七）に「多芸輪中（損斐川、津屋川）堤防水利土功会」が設立され、牧田川以南の地区が加入しました。

又、この頃「下笠輪中堤組合水利土功会」「元多芸郡五日市村及同郡竜泉寺村地内牧田川請茶園原堤防組合連合会」が組織されました。

同四十五年には江月・祖父江は排水をよくする為「両江普通水利組合」を組織しました。

大正七年（一九一八）牧田川北部の村々で「喜多輪中水害予防組合」が設立され、牧田川南北の水利、輪中堤の強化、それに高瀬・烏江間の川幅を拡げること計画しました。

昭和三年（一九二八）に、牧田川北部の村と不破郡の關係村を加えて九か村で「瀬田水害予防組合」を設立し、杭瀬川と牧田川の分流工事の推進を図りました。

なおこの頃、揖斐川と牧田川の合流点で背割分流工事せわりづみも国の事業として行われ牧田川の流水をよくしました。



牧田川・杭瀬川分流竣工記念碑

養南水防事務組合

昭和三十四年の集中豪雨と伊勢湾台風による大水害の後、水防組織の必要が痛感され、三十五年に創設されたもので、養老町の他に南濃町・海津町・輪之内町・上石津町等も加入しています。

牧田川改修工事

昭和六年に牧田川下流改修促進委員会が発足して、同川の改修工事が促進され、国と県がこの工事を行うことになり、多芸輪中・喜多輪中・大垣輪中が協力しました。最も献身的に努力した功績者は高田町の佐竹直太郎でした。

工事の中心は、牧田川と杭瀬川の合流点を背割堤せわりづみで分流し、二千八百以下流で再び合流させる工事でした。工事は昭和十一年に始められたが戦争のため一時中止され、終戦後再開されて、昭和二十五年に完成し、江戸時代からの懸案であった高瀬抜工事が解決されました。

牧田川上流、広瀬橋までの工事昭和六年から始められ広瀬ダム、牧田川用水工事が完成し、又、川筋もまっすぐになり、堤防の補強工事も行われました。

用水

養老町の水田約二千五百畝の用水は、主として牧田川・津屋川・杭瀬川の本流、支流及び地下水によって支えられているが、ひでりの時には、しばしば水争いを起しました。昭和二十三年に和解した「笠郷用水」対「下立用水」おりたての行政訴訟

養老町土地改良区一覧表

名 称	所 在 地	設立年月日	関係町村名	面積 ha	組合 員数	理事長名
瑞 穂	高田3879-3	25.8.6	養老町	122	173	片山美芳
旧十三か村	"	27.8.2	養老町・南邊町	252	644	栗田芳一
牧田川用水	"	"	養老町・根北町・上石津町	543	1,071	木村正二
五 三	"	"	養老町	538	768	細川清一
旧六か村排水	"	27.12.2	養老町・南邊町	511	569	田中金倍
養老町高田	"	27.8.30	養老町	194	327	野村 寛
色目川沿岸	"	29.2.25	"	544	698	佐竹栄一
釜 駒	"	31.11.2	養老町・南邊町	127	127	中嶋三男
養老町石畑	"	34.1.27	養老町	87	254	古市健三
牧田川北部多巻	直江396-1	35.9.11	"	132	180	野村 彰
養老町大場新田	高田3879-3	36.3.16	"	57	77	伊藤善藏
養老町江月	"	36.3.19	"	60	87	岡田文雄
養老町祖父江	"	36.4.30	"	39	57	佐竹下三
養老町大巻	"	36.5.4	"	245	266	高木 弘
養老町小坪	"	40.6.8	"	35	69	山田 實
養老町鳥江	"	45.7.16	"	66	88	近藤善友
上多度東部	小倉119-1	45.10.23	"	143	270	児玉貞三
養老北部	高田3879-3	46.6.11	"	79	185	田中雪夫
養老町河北	"	47.3.6	"	276	531	木村正二
養老町押越	押越348-1	48.1.4	"	51	171	古川徳太郎
養老町桜井	桜井621	52.7.13	"	26	64	大橋正輝
上 沢 田	上沢田4	56.10.16	"	9	34	酒井敬一
南邊北部	南邊町 志保町 志保町	56.12.24	養老町・南邊町	102	246	安藤 登
多巻東部	直江396-1	59.6.25	養老町	110	158	西脇才二

排水機設置現況表（昭和63年）

番号	排 水 機 名	排水面積(ha)	設 置 年
1	下 高 田	254	昭 和 29
2	鳥 江	70	" 23
3	高 田	304	" 55
4	鳥 江	86	" 55
5	旧十三か村	685	" 8 26
6	"	685	" 47
7	五 三	880	大 正 11 26
8	"	880	" 44
9	旧六か村	511	" 27 35
10	"	511	" 51
11	瑞 穂	180	" 51
12	大 巻	299	" 35 55
13	小 坪	40	" 23
14	釜 駒	170 210	" 33 51
15	色 目 川	316	" 29
16	"	544	" 51
17	多 巻	180	" 37
18	祖 父 江	51	" 35
19	江 月	73	" 51
20	下 池 東 部	74	" 29
21	旧下池東部		" 8
22	下 池 合 同	80	" 35
23	下 池 第 一	15	" 27
24	下 池 第 二	15	" 27

は有名であります。

揚水機は、終戦後普及し、盛んに使用されています。

「西濃用水」近年地下水位の低下で、水不足は年々深刻になったので、国は西濃用水計画を立て昭和五十八年に事業が完了しました。この用水は、揖斐川の水を上流で取入れ、垂井町を経て、別所・橋爪に至り、ここで山田支線水路に分岐し、更に牧田川を横断し、石畑支線となり、付近一帯に水がうるおうようになりました。

排 水

本町内は、海拔〇から二〇の低湿地帯が多く、自然排水が充分でなかったが、終戦後は排水機が急に増え、（現在の備え付け状況は上表の通り）冠水の心配がなくなりました。

養老町に於ける排水機の設置は明治二十八年（一八九五）に、大巻の山田貞策が高柳地内に、当時日本では第二番目の蒸気機関の排水機を設置したのが最初であります。

土 地 改 良

養老町では、すでに大正年間に小坪・根古地・室原地区で行われ戦後は三十二年に大巻に土地改良区が設置され、三十四年の水害後は急に普及し町内全区域に及び現況は上表の通りであります。

あとがき

歴史は、時を経るにつれて、住民の記憶のかなたに薄れていくものです。

私どもの養老町の祖先たちが、何千年の遠い昔から、各世代を引継いで、今日の繁栄を築き上げて下さった、その苦闘の歴史を理解し、感謝の念を深めて頂くため、編集に努力はいたしました。が、才・学ともにともなわず不十分な結果となり、まことに申しわけなく存じます。

災害は、忘れた頃にやってくると申します。この冊子をお読み下さって、郷土の治水を一層深く見直して頂く機会として頂ければ幸いと存じます。

編集委員会

編集委員（順不同）

田中育次 安福彦七 藤田信誠

種田丹治 水谷達彦

平成元年五月発行

郷土と治水

発行 養老町教育委員会
電話（〇五八三）二二〇〇